

第一問

問一 ①喚起 ②痕跡 ③靈感 ④紡(ぎ) ⑤流儀 ⑥方途 ⑦乏(しい) ⑧枚挙 ⑨潔癖 ⑩貨幣

問二 作為的な感じがして、真作とはどこか違う(というニュアンス)(十九字)

問三

独創性の探求に苦悩するロマン派好みの芸術家神話が成立する時期とも重なり、不特定多数の公衆が芸術の需要層を形成するようになったため、芸術品を受け取る特権階級の意向に適うやり方は不必要になったから。(九十七字)

問四

両者は、両極の「はざま」に位置し、「ニセモノ」も時を経て、歴史的な価値を持ち、「ホンモノ」も、それに先行する時代の遺産の上に成り立つもので、ほんとうに独創的なものかどうか、断じがたいと考えたから。(九十八字)

問五

すべての創造は「コピー」の所産であり、「コピー」の過程で「オリジナル」が生じるという基本的認識に欠け、芸術品は「オリジナル」でなくてはならない、創意や工夫、独創性といったものが認められねばならぬとする、近代的な芸術観に縛られている。(百十六字)

第二問

問一

- ア 思す(サ行四段活用動詞「思す」連体形)・に(断定の助動詞「なり」連用形)・や(疑問の係助詞)
- イ 見え(ヤ行下二段動詞「見ゆ」連用形)・給へ(ハ行四段動詞「給ふ」已然形)・ば(接続助詞)

問二

- ① 宰相の乳母 ② 姫君

問三 姫君の、男君との間の子の出産が十一月の予定であるということ。

問四 姫君の懐妊を左大臣家の人々に気づかれないようにするため。

問五 どうしてこのように何もおっしゃらないで着物を引きかぶって泣いてばかりいらっしやるのだろうか。

問六 いつも母の近くで育ってきた姫君が、長い間、生家である三条の邸に戻らず、両親の墓参りをしていないことで思い嘆いていたから。
(六十字)

第三問

- 問一 ① かつ ② ここにおいて ③ いはゆる ④ かくのごとし

問二 つねになにをもつてぎようとすか(と)

いつも何を仕事にしているのか

問三 もつてこれにさづけ、まさにさらんとす

問四 一日でもなくてはならないというものがこれ(「人道」も可)である。

問五 人道を教えることを生業とする仁斎と違い、追い剥ぎを生業とする自分たちは道に反すると恥じ、赦しを請い改心し、入門したいと思っただから。

第四問

問一

環境・福祉・家族・地域社会など時代の新しい状況に適応していこうとするものの、それぞれの関心やコントロールの及ばない出来事がさらに増え、社会が抱える課題、人びとのニーズが変容していくこと。（九十二字）

問二

核家族化で、育児や介護、教育などのケアの機能を家族だけでは担えなくなり、制度化や市場化が必要になったことと、地域社会が同質的なものから複雑な利害関係を含むものへと変容し、互助的な関係が喪失したこと。（九十九字）

問三

生活を維持するための金銭を獲得する手段である一方、共同体的特質を強く維持し続けた日本の経営がもつ企業内の濃密な仲間関係・個人と社会をつなぐ社会参加の場・社会的な包摂の場・役割を担い、自己実現する場。（九十九字）

問四

多様な需要と質・量で異なる多様な社会的ニーズを持つ人は代替的な手段を探す必要がある一方、それに応える公共財が厳しくなるトレンドは、政府に代わってその満たされない部分を埋める存在が必然的に必要だから。（九十九字）